

セカンドスクールに向けて その2「北アルプスの巻」

松本から安曇野を北上していくと、進行方向左側に高い山が連なっているのが見えます。俗に北アルプスと言われるこの山々、正式には飛騨山脈と呼ばれています。中央アルプスと呼ばれる木曽山脈、南アルプスと呼ばれる赤石山脈と併せて日本アルプスと称されるこの山々は、「日本の屋根」ともいわれており、日本の山の標高トップ 100 のうち、なんと 92 の山がその地位を占めるといって大連山です。さらに、標高が 3000mを超える山は、富士山を除けば、すべてこの北アルプスと南アルプスに存在しており、まさに、日本の屋根という言葉がふさわしいものとなっています。



そんな北アルプスのなかでも、登山家の間で憧れとも言えるのは、槍・穂高を中心としたコースでしょうか。有名な観光地である上高地から、標高 3190m の奥穂高岳や、日本のマッターホルンといわれる槍ヶ岳など、3000m 級の



山々が連なる登山道を縦走するのが定番となっています。槍ヶ岳から北東側へ進んで、大天井岳（だいてんじょうだけ、おてんしょうだけ）を経て燕岳（つばくろだけ）を目指す表銀座コース、北西側へ進んで、双六岳（すごろくだけ）、三俣蓮華岳（みつまたれんげだけ）、鷲羽岳（わしばだけ）、水晶岳、野口五郎岳等を経て、烏帽子岳（えびしだけ）に至る裏銀座コースなど、登山家を魅了する各コースが存在しています。

これらの山々は火山活動と断層の活動が複合したうえ、地形の隆起と氷河による浸食に伴って作られたもので、変化の多い急峻な地形が特徴となっています。槍ヶ岳の山容はこの代表的なものと言えるでしょう。

また、北アルプスは全体としては富山県、新潟県、長野県、岐阜県の四県にまたがるエリアとなりますが、白馬村のあたりはフォッサマグナの西側、糸魚川-静岡構造線の近くのエリアとなります。その昔、飛騨山脈が造山運動で東西に裂けたのち、その間にできた黒部川を挟んだ西側の山々を立山連峰と呼ぶのに対し、東側の山々は後立山連峰（うしろたてやまれんぽう）と呼ばれました。白馬村からは、その後立山連峰の一部が見えていることになります。

白馬村から見える代表的な山は、**白馬三山**と呼ばれる山々です。主峰の白馬岳（しろうまだけ：2,932m）とその南に杓子岳（しゃくしだけ：2,812m）、白馬鑓ヶ岳（はくばやりがたけ：2,903m）の 3 つの山が連なり、その美しい姿は北アルプスを代表する景色となっています。白馬岳（しろうまだけ）の名前の由来は、春になると雪解けで岩が露出し、黒い「代掻き馬（しろかきうま）」の雪形が現れることから「代掻き馬」→「代馬」→「しろうま」となったものです。白馬は語源的には「はくば」ではなくて、「しろうま」であるというわけですね。

ところで、春になると雪が溶けて…というのはよくある普通の現象ですが、北アルプスではこのよくある普通の現象が起きない場所があります。三千米峰が連なるここは、国内のみならず世界的にも有数の豪雪地帯であり、「**万年雪**」と呼ばれる、夏の真っ盛りでもしっかりと雪が残るところが点在しています。白馬岳の下には、日本三大雪渓に数えられる白馬大雪渓があり、日本一の雪渓とも言われています。また、雪だけでなく、分厚い氷が溶けないまま、重力によりゆっくりと流れていく、「**氷河**」と呼ばれる場所も存在しています。かつて日本には氷河は存在しないとされていましたが、1999 年に立山で永久凍土が発見された事がきっかけとなり、新たに GPS や小型のセンサー等の精密機器を使って調査したところ、この氷は一ヶ月に数 cm～30cm の速さで流れていることが判明、2012 年には氷河が日本に存在していることが明らかになりました。現在確認されている氷河はすべて北アルプスに所属しており、白馬村に最も近い唐松沢雪渓は 2019 年に氷河であることが学術的に確認されていました。そして、2025 年 1 月 6 日には、杓子沢（しゃくしざわ）雪渓と不帰沢（かえらずざわ）雪渓に関する学術論文が受理され、二つの雪渓が氷河であることが確認されました。これで白馬村内には 3 つの氷河が存在することが明らかになったのです。特に杓子沢雪渓は、JR 白馬駅前や市街地からも見える位置にあり、本家スイス・アルプスのような「街から見える氷河」として貴重な存在であると位置づけられました。

